研究 No. 0831

歴史系博物館の実物教材を活用した住まい学習の実践的研究

―住文化体験学習プログラムの教材開発と実践・検証―

主査　新谷　昭夫*1
委員　碓田　智子*2，増田　亜樹*3，毛呂　祐子*4，服部　麻衣*5，篠田　美紀*6

本研究は，歴史系博物館における住まい学習の課題を検討するとともに，そのモデルプログラムを提示し，よって住文化の継承に寄与することを目的とする。まず，博物館には住まい学習に関わる実物教材が豊富であるが十分に活用されておらず，また学習の内容が断片的であるという課題を明らかにした。つぎにこれらの課題を踏まえ，大阪市立住まいのミュージアムの常設展示室を活用し，さらに総合的な学習効果が得られるプログラムをモデル的に開発し，その効果や課題等を明らかにした。以上を通じて今後の歴史系博物館には，子どもから高齢者まであらゆる世代が共に住文化を学べる仕組みづくりが重要であることを指摘した。

キーワード：1）住文化，2）住まい学習，3）博物館，4）実物教材，5）常設展示室，6）体験プログラム

A PRACTICAL STUDY OF HOUSING EDUCATION USING REALIA IN REGIONAL MUSEUMS OF HISTORY

— Contrivance, Practice and Verification of Experimental Programs about Housing Culture—

Ch.　Akio Shintani
Mem.　Tomoko Usuda,　Aki Masuda,　Yuko Moro,　Mai Hattori,　and　Miki Shinoda

The purpose of this study is to examine housing education exhibits at historical museums and to create model programs for learning about Japanese housing culture. The main results were as follows. 1) It was clear that historical museums had large stocks of original teaching materials, but they weren't used enough. 2) Model programs of housing education were created at the Osaka City Housing Museum and the learning effects were examined. It is important for historical museums to develop ways for all generations to learn about traditional housing culture together.

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

住まいや住生活の変化とともに，日本の伝統的な住文化は姿を変え，また失われようとしている今日，日本の住まいのアイデンティティである伝統的な住文化を次世代へ継承する仕組みづくりが重要な課題となっている。学校教育においても近年，伝統文化継承の重要性が見直されている。しかし，大都市圏では伝統的な住文化を体験的に学習する場を得ることは困難な状況にある。

一方，歴史系博物館には地域の住まいや昔の住生活などに関する資料が豊富に展示され，住まい学習の教材として活用することができる。しかしこれまで，学校教育における歴史系博物館の利用は社会科や歴史の授業が中心で，住まい学習の観点からの利用はほとんどない。

そこで本研究は，歴史系博物館がもつ実物教材[注1)]を活用した住まい学習プログラムをモデル的に開発・検証し，伝統的な住文化の伝承が直面する課題に応えようとするものである。

1.2 研究の方法

本研究ではまず，予備的考察として博物館における住まい学習の状況およびその課題について検討した。

博物館における来館者向けの主な学習支援活動としては，展示関連とそれ以外のものに分かれ，前者には展示解説やワークシート等学習教材の提供などが，後者では講演会・講座（座学）やものづくり（ワークショップ），体験学習などがある。また対象年齢では，子ども・高校大学生・一般・高齢者に分かれる。これらの学習支援活動に関して，筆者らは 2006 年に歴史系博物館を対象に調査を実施[注2)]したところ，子ども向けの学習資料[注3)]や体験型のプログラムは充実しているものの，高校生以上を対象とするものは一般向けの講演会や講座を除き，ほとんどないことが明らかとなった。したがって住まい学習の活動状況については，子ども向けプログラムを対象に考察をおこなった。一方，住まい学習の実物教材の一つに建築展示物[注4)]が挙げられる。そこで，その展示のあり方等を通じて実物教材についても検討を加えた。

*1 大阪市立住まいのミュージアム　副館長・学芸員
*2 大阪教育大学教育学部教養学科　准教授
*3 大阪人間科学大学人間科学部　助教
*4 大阪市立住まいのミュージアム　学芸員
*5 大阪市立住まいのミュージアム　学芸員
*6 大阪市立大学大学院・生活科学研究科　准教授

この結果，子ども向けのプログラムは充実しているものの，住まい学習は断片的な内容にとどまり，また常設展示室は建築展示物をはじめとする住まいに関する実物教材が豊富であるが，十分に活用されているとはいえない，という課題が明らかとなった。

つぎに，大阪市立住まいのミュージアム（以下，住まいのミュージアムと記す）の実物教材を活用し，住まい学習のプログラム開発と検証をおこなった。住まいのミュージアムは「住まいとくらし」をテーマとし，常設展示室は近世と近代の２室からなる。近世展示室は，江戸時代の大坂の町並みと人びとのくらしを実物大に復元しており，情景再現型展示に特色がある。また近代展示室には，明治以降の住まいの変遷を示す街区模型をはじめ近代の生活道具などを展示し，実物教材が豊富でプログラムの多様な展開が可能となるからである。

プログラムの開発では上で明らかとなった課題をふまえ，住まい学習を総合的に実施し，さらに常設展示室を活用するものとした。また対象は，博物館の学習支援が最も活発な子どもを中心に検討した。**表 1-1** はその概要である。まず「昔のくらし学習」は実物教材を活用した学校団体向けの講座型プログラムで，住まいのミュージアムですでに実施していることから，アンケート調査を通じて課題等を検討した。つぎに，ものづくり・体験学習・展示解説を組み合わせ，常設展示室で昔のくらしを総合的に体験する「町家のくらし体験」を開発し，その検証をおこなった。またこれを応用し，外国人向けのプログラムとして実践した。さらに住まい学習に特化した「住まい学習ワークシート」を作成した。

このほか高校・大学生向けとして，住まいを総合的に学習する「大阪の町と町家解説プログラム」，さらに建築・住居系学生向けに専門的な「伝統的建築技術体験プログラム」を開発した。

2. 歴史系博物館における住まい学習の状況

2.1 子ども向け学習資料による住まい学習

全国の歴史系博物館 109 館[注5)] および野外博物館を対象に子ども向け学習資料について調べたところ，95 館から収集することができ，そのうち 74 館の学習資料に住まい学習の内容が含まれていた。その内訳は**表 2-1** の通りで，以下に概要を記す。

①建物のつくりおよび一部・地域の民家：民家の実物展示がある博物館では，民家の構造や部材，材料，屋根形式，建具など建築に関わる内容を盛り込んだガイドブックやワークシートなどが作成されている。主に小学生を対象にした学習資料であるが，内容的には建築を学ぶ高校生や大学生の基礎学習にも活用できるものである。また地域の民家は，博物館が立地する地域固有の民家形式について，その特色を学ぶものである。

表 1-1 開発したプログラムの概要

学習支援の種類		子ども向け	外国人向け	高校大学生向け
展示以外	講演・講座（座学）など	昔のくらし学習		
	ものづくり（ワークショップ）	町家のくらし体験	町家のくらし体験	
	体験学習			伝統的建築技術体験
展示関連	展示解説			大阪の町と町家解説
	ワークシート等学習用教材	住まい学習ワークシート		

表 2-1 子ども向け資料に掲載の住まい学習関連内容（N=74）

内容	館数	%
建物のつくり	12	16%
建物の一部	15	20%
地域の民家	30	41%
古代住居と生活	32	43%
中世～近世の町並みと暮らし	24	32%
昔の生活道具	39	53%
昭和の暮らし	15	20%
電化製品	13	18%
その他	4	5%

②古代の住居と生活：主として竪穴式住居を取り上げ，その特色や古代の生活を学習するものである。館内の竪穴式住居の再現展示やジオラマを見て答える内容が多い。

③中世～近世の町並みと暮らし：中世から近世ににぎわった城下町や人びとのくらしについて，町並み模型や絵地図などを使って学習するものである。ワークシートが多く，テーマとする模型などを探し，じっくり観察して答える形式となっている。また，地域の町の生活や発展を学ぶものも多い。

④昔の生活道具：生活道具類を通じて昔のくらしの知恵や工夫を知り，また生活道具の発展を知ることで，日本人のくらしの移り変わりや現在の生活との違いを子どもに気づかせる内容となっている。小学３年生の社会科での「昔のくらし」の学習を意識したものが多く，量・質ともに充実している。展示室を見て，道具類の使い方や名前を記入したり，現在の道具への変遷を確認する形式が多い。

⑤電化製品：戦後，とくに高度経済成長期以降に一般家庭で普及した家電機器を扱うものである。家電機器の発展を知るだけでなく，子どもに身近な家庭生活と環境問題の関連について考えさせ，省資源・リサイクルの大切さを気づかせる内容も含まれている。

子ども向けの学習資料には，住まい学習に関する幅広い内容が含まれる。しかし，住まいやくらしに関して断片的に扱うことが多く，必ずしも住まい学習を意図して作成されているわけではないことがうかがえる。

2.2 体験型の住まい学習

これらの学習資料は展示に関連するものであるが，展

示以外のプログラムとして近年は，従来の講演会や講座（レクチャー）に加えて，子ども向けを中心に参加・体験型が増えてきている。さらに展示室とは別に学習キットを備えた体験学習室（コーナー）を設置し，住まいやくらしに関する体験学習をおこなう例も多い。

たとえば千葉県立房総のむら（**写真 2-1**）は，広大な敷地に江戸時代後期から明治時代初期の千葉の町並みと農家が実物大で再現され，町家や農家のなかでは茶の湯を楽しんだり打ち掛けを着たりすることができる。町や農村のくらしを疑似体験ができるのが特色である。

またいつきのみや歴史体験館（**写真 2-2**）は，天皇に代わり伊勢神宮に仕える斎王が住んでいた斎宮をテーマとする斎宮歴史博物館の体験学習館としての機能を担っている。遊び・食・みやび・古代技術など，平安時代をテーマにしたさまざまなプログラムが用意されて，また建物も寝殿造をモデルに古代の建築技術を用いたもので，平安貴族の住まいと生活が体験できる。

このほか，民家や洋館などの実物を展示する野外博物館でも，建築を活用した体験プログラムが充実している。民家での囲炉裏体験，昔語り，お茶会，お月見，機織り，竹細工など，体験とあわせて参加者はその建物の空間を楽しむことができる。また建物に宿泊するプログラムもみられる。江戸東京たてもの園では，館内の建物で就寝し当時の夜の暗さなどを体験している。横浜市歴史博物館でも，隣接する大塚遺跡内の竪穴式住居の復元建物を活用し，宿泊とあわせて火おこし体験や夜の遺跡ガイドなどをおこなっている。

これらの体験型の学習は，実物大の再現展示を活用する例もあるが，体験学習室や研修室などでおこなわれることが多く，住まい学習の教材が豊富な常設展示室を積極的に活用している館は多くない。

写真 2-1
房総のむらの町並み

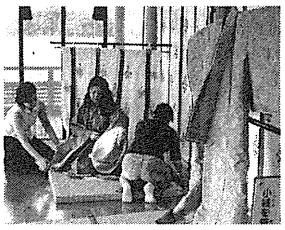

写真 2-2
いつきのみや歴史体験館

2.3 住まい学習の教材としての建築展示物

1）建築展示物の概要

つぎに，住まい学習の実物教材として建築展示物について検討する。筆者らは 2003 年以降，歴史系博物館を対象に常設展示内容の調査[注6)]をおこなっており，82 館のうち 78 館で合計 406 件の建築展示物が確認できた。

まず種類は，竪穴住居・農家・町家・洋館や集落・町並みなどの「住居」，都・城などの「都城・城」，寺院・神社などの「寺社」，学校・駅舎などの「公共建築」，工場や銀行などの「商工業」，これらに分類されない「その他」に大別される。**図 2-1** は種類別の数を示す。「住居」が最も多くて半数を占め，建築展示物が住まい学習の教材として活用できることが確認される。

つぎに縮尺を示したのが**図 2-2** である。約 1 割については 8/10 や 1/12 などのノンスケールで制作されているが，大半は 1/10，1/50，1/100 といった縮尺を意識したものとなっている。一方，縮尺を意識したものでは 1/1，1/10，1/20，1/100 が多く，なかでも実物大となる 1/1 は 111 件と 4 分の 1 以上を占める。これには部分再現も含まれるが，実物大では空間体験も可能となり，多様な学習への対応が可能となる。また 1/10 の縮尺では建物のつくりが細部まで表現され，建物の構造に関する教材としても活用が可能である。1/10 から実物大（1/1）のスケールで作られたものが全体の 3 分の 1 を占め，しかもそのうちの 6 割近く（91/154 件）は「住居」である。

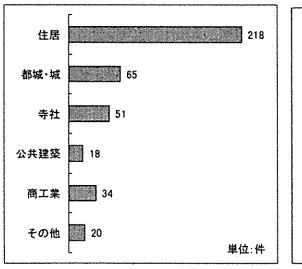

図 2-1　建築展示物の種類

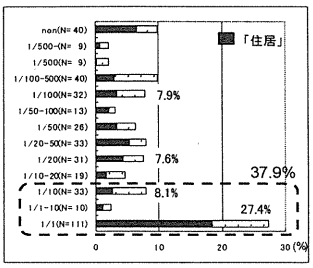

図 2-2　建築展示物の縮尺

2）建築展示物の近年の傾向

博物館の建築展示物は古くからあるが，1970 年頃には実物大の建築のなかに道具類を展示する方法がみられた。1968 年開館の神奈川県立博物館では実物大に復元された農家に民具が並べられ，また 1971 年開館の山形県立博物館では農家を移築して「農家の囲炉裏端」を再現している。当時の実物大展示は農家が中心であったが，これは農家建築が急速に失われ，その保存が緊急の課題となっていたことが時代背景にあったのだろう。

1980 年代にはいると農家以外の住宅でも実物大の再現がみられるようになった。1982 開館の神戸市博物館では近代期の外国人の生活が実物大で再現されている。さらに 80 年代の後半には展示室全体に町並みを再現し，家のなかには生活道具などを展示する情景再現の手法が導入され，近世深川の町並み（深川江戸資料館・1986 開館）や中世草戸千軒の集落（広島県立歴史博物館・1989 開館）が実物大で再現された。

一方，1990 年ころからは建築展示物に精巧な人形が置かれるようになる。その早い例に 1988 年開館の京都文化博物館の町並み模型などがあり，その後模型の人形は多くなる。さらに 2000 年開館の新潟県立歴史博物館では，実物大に再現した高田の雁木通りに人形を使い，

通りを中心にした除雪風景と，雑貨屋，駄菓子屋などの店舗風景が展示されている。

建築展示物は大型化する傾向にあり，また単に建物だけでなく，人形や道具を含めて当時のくらしを詳細に展示する情景再現型のものが増加している。住まい学習の教材として多様な活用が期待される。

3. 子ども向けプログラムの実践と評価

3.1 小学３年生向け昔のくらし学習プログラム

以上の検討を踏まえ，つぎに住まいのミュージアムを活用した子ども向けの学習プログラムを開発・検証する。まず，講座型のプログラムである「昔のくらし学習」を取り上げる。これは小学３年生の学校団体向けに，生活道具などの実物資料を用いて見学前にホールで実施するもので，以前からおこなっている。ここでは，プログラム参加校の教員を対象にアンケート調査を実施し，子どもの理解度や教員の評価を分析した。

1) プログラムの概要

プログラムの内容は，「和服体験」「日本の住まいクイズ」「昔の道具クイズ」「灯りの明るさ比べ」「蓄音機でレコード体験」の５種類である（**表 3-1**）。

「和服体験」は，昔の人へ変身することを通して子どもに昔の人をイメージしてもらい，昔のくらしへの興味を高めてもらうのがねらいである。

「日本の住まいクイズ」は，障子・ふすま・へっついなど，建具や道具の名前を知ってもらうのが主なねらいである。３節で述べるワークシートもセットになっており，クイズで学んだ題材を展示室で再度確認できる。

「昔の道具クイズ」は，箱膳や炭アイロンなどの生活道具，竿秤や大福帳などの商売道具を見せ，その用途と名前を問いかけるものである。なお，住まいのミュージアムの近世展示室は，小学３・４年生の社会科の「昔のくらし」の単元で扱う時代よりも古いが，道具はできるだけ身近なものを選び，また変化がわかるように電気アイロンや洗濯板など新しい道具も加えている。

「灯りの明るさ比べ」は，和ろうそく・灯油ランプ・，100 ワット電球の明るさを比べるものである。３種類全てを灯した後に明るい順に電球，灯油ランプと消し，最後に真っ暗な部屋の中に和ろうそくのみを灯す。江戸時代と現代の違いを体感することをねらいとしている。

最後の「蓄音機でレコード体験」は，子どもに蓄音機のぜんまいを巻いてもらい，レコードを聴くものである。蓄音機は電気がなくても音楽を聴くことができるが，その代わりに人の力が必要なことなどを説明し，電気がある時代とない時代との違いの理解をねらいとする。

表 3-1 小学校団体向けの昔のくらし学習プログラムの内容

メニュー名	内　　容
和服体験	代表の子どもと教員に羽織などを着てもらい，大阪の商家のくらしなどを説明
日本の住まいクイズ	スクリーンに畳・障子などの写真を映して，日本の住まいを説明
昔の道具クイズ	炭アイロン・洗濯板などの実物を見せて，名前や使い方を説明
灯りの明るさ比べ	ろうそく・灯油ランプ・電球を灯して，灯りの明るさや夜の不便さを説明
蓄音機でレコード体験	蓄音機でレコードをかけ，現代と昔の動力の違いや便利さを説明

2) プログラムの評価

この学習プログラムに関して，2008 年 10 月～2009 年３月のプログラム参加校の引率教員を対象にアンケート調査を実施した。調査対象校数は 209 校で，うち 165 校から回答を得た（回収率 79%）。

調査の主な内容は，学習プログラムや常設展示室での学習目標の達成度，学校での関連授業，プログラム参加時の子どもの反応などである。

図 3-1 は，プログラムの各メニューについて，教員からみた子どもの反応を示したものである。どのメニューも子どもは興味をもっていたが，なかでも実物で比較する「灯りの明るさ比べ」と「蓄音機でレコード体験」への関心の高いことがわかる。自由記述にも，「明かりの実験によって，今と生活が違うことに目を向けるきっかけができた。ろうそくの明かり・ランプの明かりでの一日の生活を想像させるのに，井戸で水をくむこと，まきを使って食事のしたくをすること，墨で字を書くこと，部屋を暖めること，お風呂に入ることなど，いろいろ考えさせることができました。」「灯りの明るさ比べが子どもたちにインパクトがあったようだ。昔の人は，薄暗い中で夜をすごしていたと言うことが実感できたと思う。」とあり，教員の評価の高いことがうかがえる。

つぎに**図 3-2** は，プログラムの内容に対する教員の評価である。教員の評価は全体的に高く，特に「学校ではできない体験ができた」「実物教材が魅力的である」の回答率が高い。一方，複数校の合同での体験学習となるため，「児童が実物をよく見たり触れたりできた」「児童が積極的に手を挙げよく参加していた」についての評価は低い。また住まいクイズについては，「児童は住まいクイズの内容をほぼ理解できていた」に「そう思う」の回答は 34%にとどまった。「児童はスタッフの説明をほぼ理解できていた」にも「そう思う」は 30%であった。自由記述には，「クイズでは知らないものが多かったので，あてずっぽうで答える場面が多かった。」「誰も知らないような昔の道具は，さっと答えを言ってもっとさっさと進めて，どういう風に使われただとか，どういう利便性があったとか，その説明を詳しくしてほしい。」などの意見がみられた。クイズ形式の問いかけは，子どもが楽しく参加できる手法として評価する意見

がある一方，上記のように子どもが当てずっぽうで答えても学習効果が低いことを指摘する意見も複数みられた。

最後にプログラムの全体評価をみると，「実物教材の内容と種類」については「ちょうどよい」が 90%以上を占めている。ただ，少数ではあるが「やや物足りない」と回答した学校からは，「七輪や洗濯板があればよかった」「かまどについて詳しく知らせてほしい」など，社会科の教科書に掲載されている道具類への希望が出されていた。またプログラムの構成については，概ねよかったと思われている。実物教材自体への評価が非常に高いことを踏まえると，道具クイズや住まいクイズでは，それが何であるのかがわかることに時間を取るよりも，子どもが実際に触れることができる体験を増やし，さらには昔と今のくらしの移り変わりやエコロジーな生活の工夫への子どもの「気づき」を促すプログラムの展開が求められているといえる。

3) 展示室見学に関する評価

図 3-3 は，教員からみた子どもの近世展示室見学時の様子を示したものである。「昔の生活道具に関心をもって見ていた」「靴を脱いであがっていた」「昔の建物に関心をもっていた」の回答が，いずれも 80%を越えている。自由に触れて体感するという住まいのミュージアムの意図が，見学時にうまく活かされているといえよう。

一方，自由記述には，「建物を様々な角度から見たり，中に入ったりできる施設は，子どもにとってたいへん興味深く，意欲・関心が高まった。解説してくれる方が数名いれば，もっと知りたいことを深められたと思う」と，展示室内での解説を求める意見がみられた。

近代展示室の見学目的は図 3-4 の通りである。教科書の「昔のくらし」の単元に直結することから，「昔の家電製品の実物を見学」に重点が置かれているが，「大阪の町家や町並みの模型を見学」も 62%の学校が見学目的にあげている。自由記述には，「８Ｆコーナーの充実。実際に手にとって体験できるコーナーや３年生などでやる説明を増やしてほしい」などがみられ，近代展示室の充実と活用の工夫が望まれている。

4) 帰校後の振り返り学習と子どもの反応

学校での振り返り学習をみると（図 3-5），「児童に体験学習や見学の感想文を書いてもらった」（56%），「体験学習に行く前に昔のくらしの単元を学習したが，帰校後にさらに関連する内容の授業を行った」（53%）など，多くの学校で対応していることがわかる。

自由記述では，「いくつかの道具を取り上げて移り変わりをカードや年表にまとめた」「「道具パンフレット」を総合の時間に作成。ミュージアムで撮った写真を柱に，本などで調べた情報もプラスしていく形の説明パンフレット」など，見学の成果をさらに発展学習につなげている学校もみられた。

教員からみた子どもの反応では，「昔の生活や住まい

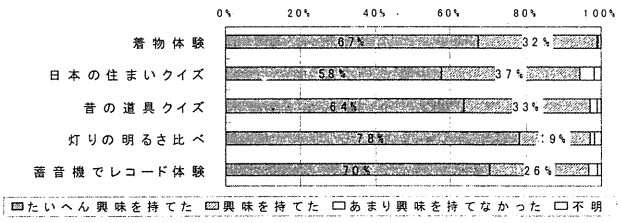

図 3-1　教員からみたプログラムの子どもの反応

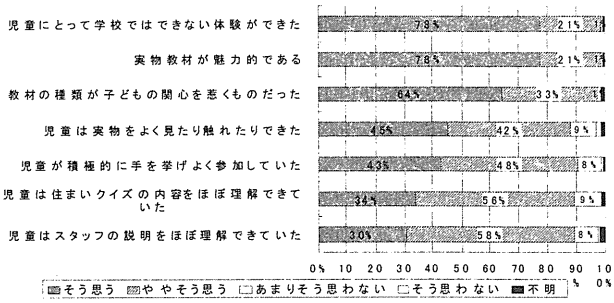

図 3-2　プログラムの内容に対する教員の反応

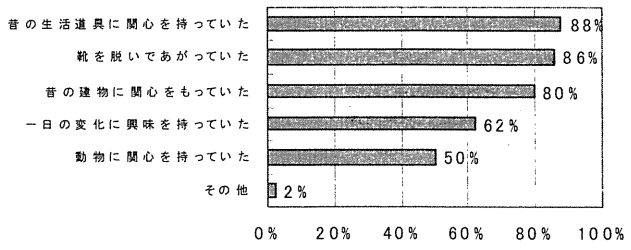

図 3-3　教員からみた子どもの近世展示室見学時の様子
（複数回答）

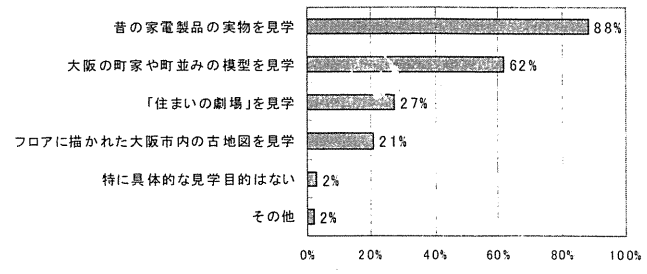

図 3-4　近代展示室の見学目的（複数回答）

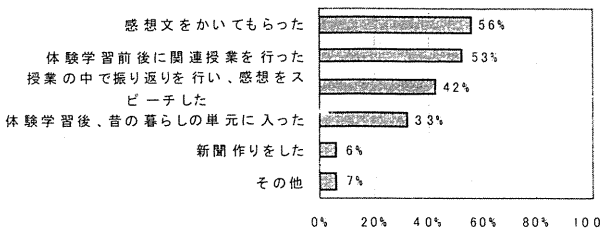

図 3-5　学校での事後学習について（複数回答）

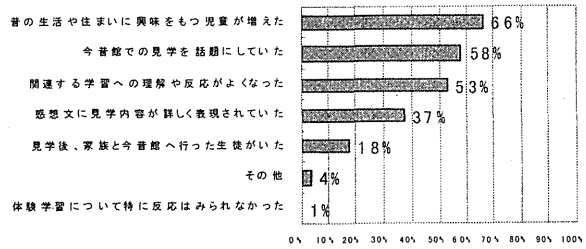

図 3-6　プログラム後の子どもの様子（複数回答）

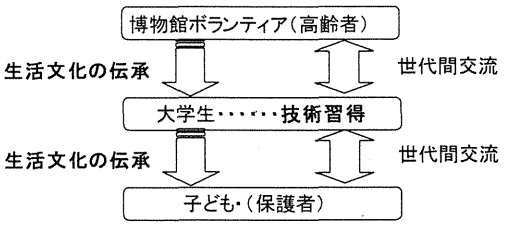

図 3-7　世代間交流と生活文化の伝承

に興味を持つ児童が増えた」「児童がミュージアムでの体験や町並み見学のことを話題にしていた」「児童の昔のくらしに関わる学習への理解や反応がよくなった」が高い比率を示し，プログラムがその後の学習意欲にもつながっていることがうかがえる（図 3-6）。

3.2　町家のくらし体験プログラムの開発と実践

２章でみたように，博物館では近年，体験型の学習プログラムが活発であるが，その場所は体験学習室や研修室などが中心で，実物教材が豊富な常設展示室を活用することは少ない。そこでここでは，住まいのミュージアムの近世展示室を活用した町家のくらし体験プログラムをモデル的に開発・実践し，さらにその評価を試みる。プログラムは，昔の子どもの一日のくらしを疑似体験する「むかしの住まいと暮らし一日たいけん」，町家での夜から朝までの一晩を体験する「夜の町家の暮らしとお泊り体験」である。

1)「むかしの住まいと暮らし一日たいけん」

①プログラムの目的

日本の伝統的な住文化であった障子を貼り替える，座敷をほうきやはたきで掃除する，玄関に打ち水をする，季節に応じてしつらいを替えるなど，かつてはごく普通にみられた日常生活の光景は，現在では珍しく懐かしいものになってきた。こうした住文化を継承する体験型の学習プログラムを開発することが第一の目的である。

またこのプログラムは大学生向けの学習プログラムとしても位置づけ，大学と博物館の新たな連携のあり方をさぐることを第二の目的とする。そのため，計画段階から実施までを大学生に任せ，教員や住まいのミュージアムの学芸員は基本的事項を確認し，学生の企画をサポートするにとどめた。

さらにミュージアムボランティアの協力を得て，子ども（および保護者），大学生，高齢者の多様な年齢集団が相互交流し，教え合い，学び合うという，異世代間で住まいとくらしの文化を伝承する仕組みをつくることが第三の目的である。ボランティアは高齢者が中心で，その経験を活かして着物の着付け，障子貼り，お茶会，むかしの遊び，近世展示室の町並みを巡る町家ツアーなど体験型の学習ログラムをおこなっている。一日たいけんプログラムはその蓄積を発展させ，体験メニューの実施に必要な技術を生活経験豊かなボランティアが大学生を指導し，さらに大学生が先生役となって子どもや保護者に教えることになる。図 3-7 はその仕組みを示す。

②プログラム作成のプロセス

プログラムは小学生の親子を対象に，2007 年８月の２日間に実施したが，準備は４月から始めた。まず４月に大阪教育大学および大阪市立大学の学生スタッフが中心となり，体験メニューの検討が進められた。６月からは住まいのミュージアム学芸員らも加わり，最終的に９つの体験メニューを実施すること決まった（表 3-2）。町家の掃除体験（写真 3-1）や，ユニークな発想により学生から提案された肝だめし（写真 3-2）などである。

各体験メニューの具体的な実施方法についてはボランティアからアドバイスを受けるとともに，障子貼りや着付け，竹細工などの技術も伝授された。

一方，それぞれのメニューに関して学校の授業づくりと同様に，「各体験メニューの時間配分と組み立て」「子どもに学んでもらいたい内容」「学生が指導するときの留意点」など，学習指導案に準じるものを作成した。７月下旬からは，指導案に基づいて，イベント当日に配布する「一日たいけん学習ノート」「まち探検シート」「修了証書」「絵日記シート」などの教材づくりを進めた。「一日たいけん学習ノート」は，子どもに体験イベントの感想を書いてもらうとともに，体験を振り返って自宅で家族と話をしたり，反復学習をするものである。また一緒に参加した保護者にも感想を記してもらう「感想シート」を作成した。さらに，このプログラムで学んだことが子どもの日常生活に定着したかをみるために，プログラム終了後の家庭での子どもの様子を書いてもらうシートも準備した。

③プログラムの評価

プログラム当日のタイムスケジュールは表 3-3 に示す通りで，近世展示室の全体を活用する内容であった。以下，参加者の評価を検討する。

(a) 子どもと保護者の感想

肝だめし終了後，子どもに体験全体の感想を学習ノートに記入してもらったところ，98%の子どもが肝だめし

のことを取り上げていた。他の体験の感想も多数みられたが，肝だめしの興奮がまだ続く中で感想を書いてもらったため，その刺激が非常に強かったと考えられる。一方，保護者の感想には「親もしたことがない事が体験できるのがおもしろかった」というのもあった。子どもを対象としたプログラムであったが，保護者にとっても学びの場となっていた。

つぎに，このプログラムでの体験が子どもの日常に影響を与えたかのをみるために，１週間後，子どもに絵日記を，保護者には自宅での子どもの様子を書いてもらった。絵日記の絵と文章に表現された内容をみると，体験

表 3-2　体験メニュー

体験メニュー	主旨
1．浴衣の着用	浴衣を着て昔の子どもの気分で一日を過ごす
2．まち探検	むかしの住まいや町並みを体感する
3．お茶会	座敷に座って、お作法を体験する
4．むかしの遊び体験	むかしの遊びを楽しながら、交流する
5．竹細工	建築や生活用品に使われる竹の性質を学ぶ
6．町家のお掃除体験	座敷ほうきやはたきの使い方を学ぶ
7．障子貼り体験	障子貼りを通じて、住宅のメンテナンスを知る
8．むかしのおやつ	素朴なおやつを味わう
9．肝試し	伝統のない時代の町の暗さを体感

表 3-3　プログラム当日のタイムスケジュール

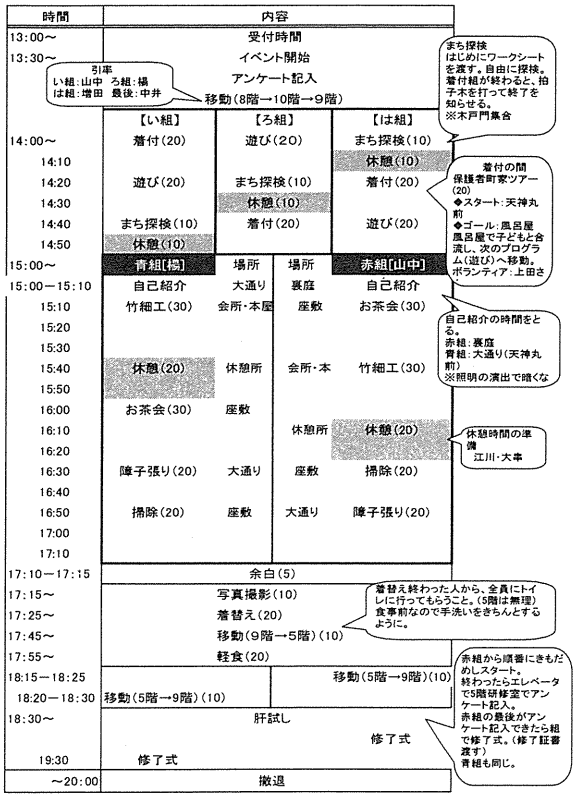

写真 3-1
はたきでホコリ落とし

写真 3-2
親子で肝だめし

直後の感想でほとんどの子どもが書いていた肝だめしは40%に減少し，その分，浴衣や竹のお箸づくり，障子貼りなどの体験の記述が増加している。また保護者に書いてもらった自宅での子どもの言動には，「家に障子がないので昔の人は大変なことをしていると関心していました」「ここのほこり，はたきがあれば届くのに・・・，家にないの？」などがあり，今回の町家のくらし体験プログラムを子どもが受け止め，日常生活にフィードバックさせるきっかけづくりになったことがうかがえる。

(b)参加学生の評価

プログラムの企画や実施に関わった学生の評価は，学生の感想から検討する。

このプログラムは住まいとくらしの伝統文化をテーマとすることから，まずは学生自身が伝統的な生活文化を学ぶ必要があった。これに関して学生は，生活経験豊かなボランティアとの協働によって実現できたことを学生自身が実感している。また，ボランティアの熱意と豊かな生活経験の蓄積に対する驚き，立場が異なる人との協働によって一つの企画を作り上げたことへの達成感，子どもや保護者とうまく接することができるかという不安とそれができた喜びなどの感想がみられた。

一方，プログラムの参加者へ大学生との関わりについて聞いたところ，いろいろと教えてもらったという意見が多く，学生がボランティアから学んだ住文化を子どもに指導する仕組みがうまく機能したことがうかがえる。

(c)ボランティアの評価

プログラムに協力したボランティアに聞き取りをおこなったところ，学生のプログラムづくりに対して，机上の計画をやや厳しい目でみていた。一方，学生がそれぞれのプログラムについて担当者を決め，自分の担当に責任感を持って実施した点や，タイムスケジュールに従い自分の動きを確認して行動していた点などは，自らとの大きな違いであると評価していた。学生とボランティアでは行動スタイルが異なるが，このプログラムの開発では学生が計画を練り，ボランティアの指導のもとに試してみて調整が図るという，双方の長所をうまく活かすことができたといえよう。

2）夜の町家のくらしとお泊り体験

①プログラムの内容

前節のプログラムを発展させ，小学生と保護者 20 組を対象に，2008 年 11 月に「夜の町家で昔の住まいと暮らしのワクワクたいけん」を実施した。「むかしの住まいと暮らし一日たいけん」が昼間の町家を舞台にしたプログラムであるのに対し，このプログラムは夜の町家や町を舞台とするもので，参加者は小学生 37 人，保護者 31 人の合計 68 名であった。さらにこの参加者のうち 10 組の親子には，居住実験として，住まいのミュージアム

の再現町家でのお泊まり体験に参加してもらった。

夜の町家のくらし体験では，まず町家の座敷に分かれ，めいめい膳を使って夕食を食べてもらった（**写真 3-3**）。食事の中では，箱膳の使い方などの解説もおこなった。その後，閉館後の展示室内を，提灯を持った子どもに「火の用心」の声とともに，拍子木を打ちながら夜回り体験をしてもらった（**写真 3-4**）。途中に立ち寄った町家では，「すりあげ戸」など町家の戸締まりの工夫を体験してもらい，また町家のなかでは，昔の生活道具の体験学習も合わせておこなった。これらの体験メニューは，大学生とボランティアが中心になって担当した。

終了後，子どもに実施したアンケート調査では，どのメニューも子どもの満足度が概ね高かったが（**図 3-8**），特に高学年で印象が強く，「むかしはいまより暗かったのでびっくりしました」などの感想が寄せられた。

写真 3-3　御膳を使った食事

写真 3-4　夜回り体験

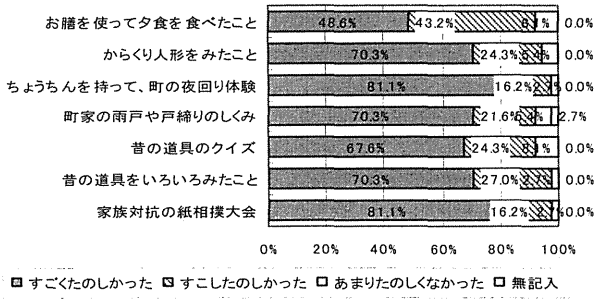

図 3-8　夜の町家のくらし体験への子どもの評価（n=37）

お泊まり体験では，家族ごとに町家の座敷などに分かれて翌朝まで宿泊してもらった。終了後，保護者に子どもの様子などを記述してもらったところ，「町家の夜回りや宿泊は，日常の生活やホテルの宿泊では味わえないことで，子どもも関心をもてた」「昔の夜の暮らしは照明が少ないため薄暗く，現在と比べ不便であったことは実感できたようです」「普段の生活では，伝統的な住まいや藩校の文化にふれる機会はなく，今回のようなお泊り体験は大変貴重だと思います」など全ての回答に，子どもにとって伝統的な住まいを体験する機会になったとある。日常では味わえない特別な体験の評価が高かった。

宿泊を伴う体験プログラムは，受け入れ可能な人数が限定され，スタッフの負担が大きいことや安全性の確保などの課題もあるが，むかしの建物やくらしを特別に体験できる点で参加者の満足度が高い。博物館の展示室を活用した体験学習プログラムのあり方の一つとして，さらに検討の余地があろう。

②絵日記からみる子どもの印象

参加した子どもに１週間後，プログラムの印象を絵日記に書いてもらったところ，23 名分が集まった。内容は 23 名中 7 名（30%）が夜回りとネズミ小僧の絵を描き，以下お弁当 5 名（22%），福引き 2 名（9%），紙ずもう他昔のおもちゃ 3 名(13%)，からくり人形２名（9%），その他２名，そしてお泊り体験のメニューである落語の場面２名であった。以下，これらの絵日記を通じて子どもの印象を心理学的に分析したい。

まず，画面中央いっぱいに大きな絵が表現されており，プログラムが及ぼした体験の強さと印象の大きさがうかがわれる。おもちゃやお弁当などのモノだけではなく，他の参加者や体験の主体としての自分など，人間の表現が多く，プログラムを通して大きな体験であったと分析される。

つぎに町家体験では，夜道を逃げる泥棒と町家の風景，提灯，拍子木など夜回りの絵が 30%みられた。電気のないくらし，町家の仕組み，防犯システム（鍵），人的防犯ネットワークの組み込まれた町などが，子どもに印象深く受け入れられたと解釈される。つぎにお弁当の絵が多かったが（22%），食についての興味のほか，プログラムの最初がお弁当であったことによるインパクトの強さ，プログラムへの期待の大きさなどが反映している可能性もあると考えられる。

このように絵日記からも，プログラムが子どもにとって大きな体験で，特に町家体験を通じて江戸時代のくらしや町家の工夫などが印象として残っており，その学習効果が確認できる。

3.3　子ども向けワークシートの開発

住まいのミュージアムでは子ども向けのワークシートとして，これまでは小学校低学年以下を対象としたもののみであった。今回，住まい学習の観点からこれを見直すとともに，さらに小学校団体見学用を新たに作成した。

1）小学校低学年以下向けワークシート

子ども向けワークシートは，子どもの発達段階など子どもの実態に合ったものにする必要がある。小学校中学年以上の子どもは自主的にワークシートの指示を読み，内容に沿って見学するのに対して，小学校低学年以下ではワークシートを見るより，保護者の言葉がけに応じて展示物に興味を持つ様子がみられる。そのため，ワークシートは文字よりもイラストなどを多用してわかりやすくすることが求められる。また見学時の興味の対象は，近世展示室のなかに点在する動物やハンズオン展示の昔のおもちゃなどが中心である。この発達段階では，動物

探しなどの楽しさや充実感を得る経験を通して博物館にまず興味を持たせ，その後に昔の住まいやくらしに親しんでもらうことが重要であると考える。

そこでワークシートは，近世展示室に関しては動物探しを最初に掲載し，つぎに店の商品やかまど・便所・五右衛門風呂など「住まいとくらし」に目を向ける内容を取り入れた。また近代展示室では，街区模型のなかから子どもの遊びを探す内容とした。空き地や路地での「たこあげ」「まりつき」などといった伝統的な遊びから，近代的な公園での「ブランコ遊び」への移り変わりを学ぶことができるようにした。

2) 学校団体向けワークシート

前述の小学３年生を対象とした昔のくらし学習に対する評価には，子どもの「気づき」を促す，あるいは展示室内での解説を求める意見がみられた。また低学年の子どもと異なり，中学年以上は展示室の動物に加えて，日常生活に関わる台所・風呂・便所や店の商品などにも興味をもっている。そこで昔のくらし学習を補完し，住まい学習に特化したワークシート「住まいの名前を探してみよう」を作成した。

住まいに関する子どもの知識は非常に少なく，昔のくらし学習では入門編として「日本の住まいクイズ」をおこなっている。ワークシートはこのメニューに連動しており，たとえば障子に関しては，障子の絵とともに「襖と障子はどのように使い分けていたのかな？」と問いかけている。これに対して，子どもは展示室で障子と襖の使われている場所を観察し，住まいの工夫についても考えることができる。ワークシートを手に子どもは，日本の伝統的な住まいに興味をもって熱心に見学している。

4. 外国人向け町家のくらし体験プログラムの実践

近年，日本への留学生や日本の学校へ通う外国人の子どもが増えてきているが，彼らが日本の伝統文化に触れる機会は限られる。そこで住まいのミュージアムの常設展示室を活用し，日本の伝統的な住文化を体験するために実施したのが町家のくらし体験で，子ども向けのプログラムを応用して実施した。また対象が外国人であることから，まず参加予定者等にアンケート調査をおこない，参加者の生活や関心の程度などを事前把握した。一方，プログラムの企画および実施に留学生が参加し，留学生の視点を取り入れた点に特色がある。ここでは外国人の子どもおよび留学生を対象に実施した。

4.1 外国人の子ども向けプログラム

大阪府八尾市は，全国のなかで特にベトナム人が集住している地域で，公立小学校へ通うベトナム人の子どもが多い。そこで，八尾市で外国人の子どもに学習活動をおこなっているＮＰＯ法人トカッピと連携し，トカッピ子ども会に所属するベトナム人の小・中学生とその保護者を対象に，2008 年９月に実施した。

表 4-1 外国人子ども・留学生向け町家のくらし体験メニュー

１．昔の生活道具の体験学習（午前）
２．和服を着る
３．昔の遊びと自由撮影
４．お茶会
５．障子張り
６．町家ツアー
７．アンケートの実施

プログラムの実施に先立ち，八尾市内の小学校の民族学級等に参加しているベトナム人の子ども 60 名に，アンケート形式で簡単な生活調査をおこなった。これによると，大半の子どもは両親が来日してから日本で生まれており，学校では不自由なく日本語を使用していた。しかし家庭内では親とベトナム語で会話し，食事はベトナム料理を食べることが多い，入浴はシャワーのみなど，ベトナムの生活習慣を身につけていることが明らかになった。また，自分の家庭の生活スタイルが日本人の同級生とは違っていると認識している子どもが多かった。

プログラムの主な体験メニューは**表 4-1** の通りである。まず研修室で住まいとくらしに関する学習（住まいクイズ・昔の生活道具解説・灯りの実験）をおこない，その後浴衣に着替え，近世展示室において昔の遊び・町探検・障子貼り・お茶会を体験するというものである。

プログラム終了後に記入してもらった子どもの感想では，障子貼りは人気が低めであったが，全体としては「とても面白かった」と満足度が高かった。また保護者も参加していたが，非常に熱心であった。

4.2 留学生向けプログラム

留学生向けプログラムについては，大阪日本語教育センターの協力を得た。まず留学生 69 名を対象に，日本の伝統文化の学習に関するアンケート調査を実施したところ，日本の祭りや食文化・食生活，正月などの伝統行事，伝統的な習慣といった日常生活に関わることは比較的学習経験があることがわかった。しかし，日本の美術や工芸品，日本の伝統的な住宅についての学習は少ない。自由記述には音楽・映画・アニメ・ゲームなどが挙げられ，現代的な日本文化に関心のあることがうかがえる。一方，障子やふすまなど日本の住まいの要素については，見たことがあり知ってはいるものの，その名称がわからない学生の多いことが判明した。この結果を踏まえ，留学生向けのプログラムでは日本の住まいに関連する名称を学習できるように配慮した。参加者は，大阪日本語教育センターに在籍する中アジアや中東を中心とする 6 カ国の留学生で，2008 年 10 月に実施した。

プログラムの体験メニューは，ベトナムの子ども向け

と同様のものである。終了後のアンケート調査で，今回初めて体験したことを尋ねると，「昔の生活道具を見たこと」が 95%，「日本の伝統的な住まいについて」85%，「障子を張ること」70%であった。「畳で正座をすること」「お茶会」「和服を着ること」も初めてという回答が半数を超えた。来日して１年程度の留学生にとっては，初めての体験内容が多かったことがわかる。また，このプログラムによって日本の伝統文化について「大変勉強になった」という回答が 75%を占め，「少し勉強になった」25%を含め，参加者全員が日本の伝統文化の勉強になったと感じていた。興味を持った体験では「和服を着ること」「町家ツアー」「お茶会」が 70%以上を占めていたが，「障子はり」は 20%の回答しかなかった。留学生は障子に馴染みがないので，よく理解できなかったのだろう。

自由記述の感想では，「いろんな日本文化をよく勉強してもっと興味を持つようになりました。中国の自分の文化を守るべきことを痛感しました。」「この体験を通じて，いろんな日本の文化，昔のことを勉強しました。もっと体験がしたかった。本当におもしろかった。」など，今回のプログラムが日本の文化理解に役だったという意見が多くみられた。

5. 高校・大学生向けのプログラムの実践と評価

住まいのミュージアムには実物大に再現された町並みをはじめ，住まいに関する多くの建築模型を展示している。そこでこれらの建築展示物を活用し，住まいに関する総合的な学習をおこなう「大阪の町と町家解説プログラム」を高校・大学生向けに開発し，その効果を検証した。さらに建築・住居系学生向けとして，木造住宅の軸組模型を用いた専門的な体験学習「伝統的建築技術体験プログラム」を開発した。

5.1 大阪の町と町家解説プログラム

1）プログラムの概要

住まいのミュージアムの実物教材を用い，大阪の町と町家やそのくらしの変遷を解説するプログラムである。**表 5-1** に学習テーマを示す。まず①建築の基本的知識は，屋根形式や壁の仕上げなどに関する知識，軸組構造と壁式構造の違い，一戸建てと長屋建ての違いなど住宅建築の基本を理解するものである。つぎに②江戸時代の大坂の町は，町割と町の規模や構成，宅地割のあり方など，町家の特色を理解するために必要となるものである。③大阪の町家は，町家の一般的特色や大阪の町家の間取り・外観上の特徴など，町家を建築的な側面を理解するものである。最後に④伝統的な住まいの工夫と技術は，町家のくらしでみられるさまざまな工夫と伝統的な建築技術に関して理解を深めるものである。

つぎに，これらのテーマのもとに項目と解説の内容について検討し，21 項目を選定した。項目数や解説内容は，対象としているのが一般の高校生や大学生であることから，あまり専門的にならないようにした。

最後に，解説内容に基づき，近世及び近代の展示室のなかから用いる実物教材を選定した。選定に際しては，近世展示室の町家のうち通り庭形式の本屋に対して薬屋は表屋造り形式であり，また人形屋は一部小屋組が露出するなど，それぞれの町家の特色を踏まえている。一方，大阪の町割や町全体の姿，町家の配置などに関しては街区模型や地図の方が理解しやすい。町割や町の姿は江戸時代と大きく変わることがないので，近代展示室の鳥瞰図（大阪市パノラマ地図）や街区模型を選んだ。

2）プログラムの評価

このプログラムの学習効果については，大阪教育大学の学生の協力を得て検証をおこなった。まずプログラムの前後における各項目の理解度の変化をみるために，項目ごとに理解度を３段階（実施前：よく知らない・聞いたことはある・よく知っている，実施後：よく理解できなかった・だいたい理解した・よく理解できた）で自己評価してもらった。さらに町家の特色についての理解度をみるため，プログラム終了後に江戸時代の町家である適塾[注7)]を見学し，「適塾の町家としの建築的特色」をテーマにレポートを提出してもらった。なお，時間の関係から解説は，プログラムの一部の項目（表 5-1 の NO ３・４・20）を省略した。

まず項目ごとの理解度であるが，プログラム前において「一戸建てと長屋建ての違い」「江戸時代の寸法の単位」に関しては，「聞いたことはある」が半数を超えていたものの，他の項目は「よく知らない」が大半であった。また，「よく知っている」とした項目はほとんどなかった。これに対してプログラム後には，ほとんどの項目で「だいたい理解した」「よく理解できた」にチェックされており，理解度の進んだことがうかがわれる。なかでも「町家と農家の違い」と「潜り戸の鍵の仕組み」は，ほとんどの者が「よく理解できた」としている。前者は農家の写真を見せることにより町家との違いが視覚的に理解でき，また後者は実演を通じて体験的に理解できたからであろう。一方，「屋根葺材料の種類」「江戸時代大坂の町の構成」「座敷飾りの構成」「夏建具と建具替」など一部の項目については，「よく理解できた」がかなり少ない。解説の方法に工夫が必要であろう。

つぎに適塾のレポートをみると，ほぼ全員が「町家の基本的間取り」に触れているが，町家の特色を示すその他の項目はほぼ半数にとどまっており，理解が十分ではないことがうかがえる。自由記述にも，「学芸員の話を多く吸収できなかった」や「見学中にすべてを理解でき

表 5-1　高校・大学生向けの住まい学習用展示解説プログラムの概要

テーマ	番号	項　目	解説の内容	活用する教材
建築の基本的知識	1	屋根の形式	切妻，寄棟，入母屋，宝形造の区別について説明。	近代展示室の街区模型，イラスト図面
	2	屋根葺材料の種類	桟瓦，本瓦，こけら，檜皮の違いと特色について説明。	近世展示室の町家
	3	軸組構造と壁式構造	軸組構造と壁式構造の比較を通じて，伝統的木造建築の特色を説明。	近世展示室の人形屋，軸組模型
	4	木造建築の部材名称	軸部・小屋組の主要な部材について説明。	近世展示室の人形屋
	5	一戸建てと長屋建ての違い	一戸建てと長屋建ての区別ついて説明。	近世展示室の町家
江戸時代の大坂の町	6	江戸時代大坂の町割	船場地域では 40 間四方の格子状町割となっている。	近代展示室のパノラマ地図
	7	江戸時代大坂の町の宅地割	両側町で，宅地の奥行は 20 間で統一され，町の背面には背割り下水または路地が通っていた。	近代展示室の「北船場」模型
	8	江戸時代大坂の町の構成	町の入口に木戸門が，なかほどには火の見櫓を備えた町会所が建っていた。５～６町に１町は風呂屋もあった。	近世展示室の町並み
大阪の町家	9	町家と農家の配置上の違い	主屋が道路に直接面し，また隣家とは軒を接して建つのが町家の特色である。	近代展示室の「北船場」模型，農家の写真
	10	町家とサラリーマン住宅との違い	町家は職住一致の住居形式である。	近世展示室の本屋
	11	町家の基本的間取り	通り庭に沿って表から店の間，中の間，奥（座敷）の三室が並ぶ。規模が大きくなれば表屋造りとなる。	近世展示室の本屋
	12	坪庭（中庭）の役割	坪庭は，表屋造りの町家において通風・採光のために設けられたものである。	近世展示室の薬屋
	13	座敷飾りの構成	床・棚・書院を飾り，次の間境には欄間を備える。明治以降になると長押も付けられる。	近世展示室の薬屋座敷
	14	町家の正面外観意匠	正面２階を漆喰で塗り込めて防火に配慮し，また１・２階の壁面位置を同一にするのが大阪の特色である。	近世展示室の町並み
	15	大戸の種類	すり上げ，跳ね上げ，開き，引き込みの形式について説明。すり上げ戸については実演も行う。	近世展示室の町家
伝統的な住まいの工夫と技術	16	夏建具と建具替	６月から９月の期間，座敷まわりの障子・襖は夏向きの簾戸へ交換し，部屋には籐の茣蓙を敷く。	近世展示室の薬屋座敷
	17	しつらいの調度	ハレの日には座敷に屏風を建て，また床の間には季節に合わせて掛け軸を飾る。	近世展示室の薬屋座敷
	18	貸家の裸貸し	裸貸しは大阪独自の貸家方法で，畳や障子，竈，流しなどの付き物は全て借家人が用意する。	近世展示室の裏長屋
	19	江戸時代の寸法の単位	長さの単位としての尺・間について説明。	近代展示室のパノラマ地図
	20	継手と仕口	継手・仕口の違いとその技術について，模型を用いて説明。	軸組模型
	21	潜り戸の鍵（くろろ）の仕組み	江戸時代から用いられていた二段階ロック（くろろ）の仕組みについて，実演しながら説明。	近世展示室の唐物屋

なかった」などとある。１回のプログラムで解説する項目数を検討する必要があると思われる。

一方，自由記述には「自分で調べ直した時に，とても理解しやすかった」という感想がみられ，そのときはわからなくても学習の手助けになっていることがわかる。また，「もっと日本の建物の構造や，施されている工夫を知りたくなりました」や「今回見学した江戸末期の建築にくわえて色々な時代・国の建築をもっと知りたいと思った」などからは，今回のプログラムが新たな学習意欲を引き出すきっかけとなっていたことがうかがえる。

5.2　伝統的建築技術体験プログラム

1）軸組模型の制作を通じた教育

軸組模型（**写真 5-1**）の組み立て体験学習を通じて，町家の伝統的木造工法の理解につなげようとするものである。一方，模型制作についても大阪工業技術専門学校の協力により大工技能ものづくり学科の学生がおこない，制作自体も体験学習として位置づけられる。

制作に際しては，模型の中にできるだけ多様な継手と仕口を入れ込むこと，体験学習に使用するため繰り返しの利用に耐え，取り外しが容易であることなど，実際の建築とは異なる要素が課題とされた。また住まいのミュージアムの町家に使われている工法とのつながりも考慮する必要があった。これらの条件のもと，学生は図面作成から墨付け，加工までの全作業をおこない，さらに完成後には軸組の仕組みをプレゼンテーションした。

完成後，学生は「建物の仕組みが全部頭に入った」と述べている。模型制作には建物一軒分の仕組みや建築工程を必要とすることから建物全体の理解につながり，構造の知識が格段に飛躍したことがうかがえる。

2）軸組模型の組み立て体験学習と評価

模型を使った体験学習は，大阪市立大学生活科学部居住環境学科の協力を得た。学生に，単に組み立て方だけを指導した場合と，伝統工法や木材の性質についての講義とセットで組み立てを体験した場合とで，理解度の違いを自己評価してもらった。

模型の組み立ては，各部材に打たれた番付に従い，土台→柱と差し鴨居→小屋組の順でおこなう（**写真 5-2**）。

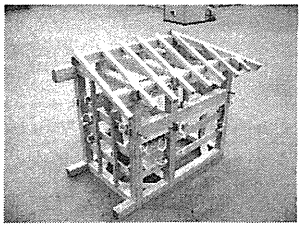

写真 5-1　軸組模型

写真 5-2　組み立て作業風景

組立手順の指導だけの場合は学習効果が薄く，学生も理解しないまま終わる結果となった。ただ，試行錯誤したことは強く印象に残っていたようで，建築教育が進んだ学生には効果のあることが推察される。

一方，講義の後に組立作業をおこなうと，在来工法への理解度が大きく上昇し，模型の組み立て時間が大幅に短縮された。模型の各部分について考えながらあるいは理解しながら組み立てることができ，反復効果もあって，知識として学生の記憶に残ったと考えられる。

学生のレポートには，「立体を作っていくための様々な”しかけ”に触れることができるというのが，この模型のいいところだと思う。大工さんが組み立てる感覚を体感できる教材だと言える。」「それぞれの部材の役割がわかった。今の時代よりももっと膨大な労力が必要だったことが想像できた」などとあり，軸組模型による体験学習への評価が高かった。

今回の体験学習プログラムではさらに，近世展示室のなかで町家の軸組に関する説明を合わせておこなった。学生の感想文からは「町家ツアーをすることで，ミュージアム内の建築でほぞを差している部分が見えたり，釘を使わない木造建築は移築できると聞いたりするのも分かりやすかった」など，軸組模型と再現展示空間を結びつけた学習効果がうかがえた。ただ，軸組模型から町家にまでを一連的に解説することは専門的な知識を要し，スタッフが限定されるという課題が残る。

6. おわりに

最後にまとめとして，歴史系博物館における住まい学習のあり方について触れておきたい。

博物館における学習支援は他の施設等と異なり，実物やレプリカ，模型などの資料，つまり実物教材を有し，その活用が可能である点に最大の特色がある。しかも第３章でみたように実物教材による学習は評価が高い。しかし，歴史系博物館に豊富に展示されている建築展示物や生活道具類などの実物教材を活用した住まい学習は，十分とは言えないのが現状である。特にものづくりや体験学習などの展示以外のプログラムは，体験学習室や研修室等で実施されることが多い。学習効果を高めるためにも，展示室の豊富な実物教材の活用が求められる。それぞれの展示資料はシナリオのもとに目的をもって展示されているが，これを住まい学習の観点から見直し，教材としての活用方法を検討することが必要であろう。

つぎに，博物館では近年、ボランティア活動が学習支援の一つとなり、また博学連携の一環として、ボランティアや大学生を受け入れることが多い。「町家のくらし体験」では，ボランティアと大学生が協働しプログラムを実施した。このほか地域の人びとが担い手となることもある。こうしたプログラムの担い手の幅が広がることにより，学習プログラムが活性化し，また内容の深まることが期待される。博物館における住まい学習は，実物教材を介して子どもから高齢者までが出会い学び合うことであり，その仕組みをつくることが課題となろう。

＜注＞

1) ここで実物教材とは，博物館で収集または展示する博物館資料を指し，実物資料だけでなく，模型やパネルなどの二次資料も含む。
2) 都道府県，政令指定都市，県庁所在都市，中核市および東京都特別区が設置した歴史系博物館 109 館を対象にアンケート調査を実施し，99 館から回答を得た（回収率 90.8%）。
3) リーフレットや館内ガイド，ワークシートなど博物館での見学や学習をサポートする資料を指す。
4) 建築模型および建築の実物（部分を含む）を移築して展示したものを，ここでは建築展示物と呼ぶ。
5) 注２）参照。
6) 常設展示の展示内容を把握するため，展示レイアウトのスケッチ，写真撮影および学芸員へのヒアリングとともに展示内容がわかる図録や要覧などの収集をおこなった。なお，対象館については注２）を参照。
7) 大阪市中央区北浜に建ち，江戸時代末期に緒方洪庵が私塾（適塾）を開いた町家として知られる。建物は表屋造形式で，確実な史料を欠くものの江戸時代後期の建築と考えられ，重要文化財に指定されている。

＜参考文献＞

- 谷直樹・新谷昭夫・碓田智子：歴史系博物館を活用した住教育の現状と少子高齢社会における展開に関する実践的研究，（財）第一住宅建設協会　調査研究報告書，全 75 頁，2007
- 碓田智子・大北博子・新谷昭夫・増田亜樹ほか：歴史系博物館を活用した学習プログラムの取り組み－全国の博物館を対象とした学習支援調査から－，大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報５，pp.13-22，2007
- 碓田智子・山中裕子・江川奈生・増田亜樹・新谷昭夫ほか：むかしの住まいと暮らし一日たいけん－歴史系博物館を活用した子どものための住文化体験プログラムの開発と実践－，（財）住宅総合研究財団「住まい・まち学習」実践報告・論文集９，pp.65-68，2008
- 碓田智子・楊暁莉・チュン ジップ ヴィトラン・増田亜樹・新谷昭夫・毛呂裕子・服部麻衣・谷直樹，留学生と外国ルーツの子どものための居住文化体験プログラムの実践，（財）住宅総合研究財団「住まい・まち学習」実践報告・論文集 10，pp.99-102，2009
- 碓田智子・松村佳奈・服部麻衣・増田亜樹・毛呂裕子・新谷昭夫・谷直樹，今昔館の小学校団体向け体験学習プログラムの評価－小学校教員を対象としたアンケート調査から－，大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報７，pp. 35-42，2009

＜研究協力者＞

楊堯莉，チュン ジップ ヴィトラン，大北博子
以上，大阪教育大学学生
山中裕子，江川奈生，三瀬寛子，松村佳奈，辻本拓也，大越慶美
以上，大阪市立大学学生